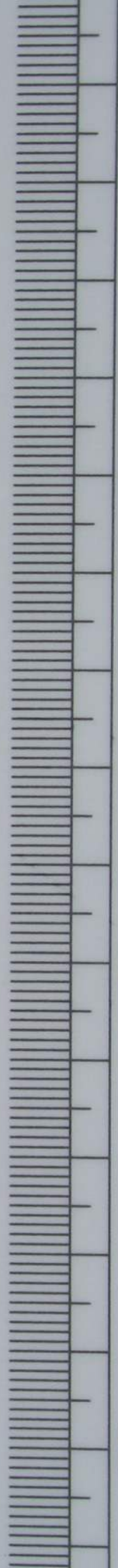




經標
春
繼
此
款



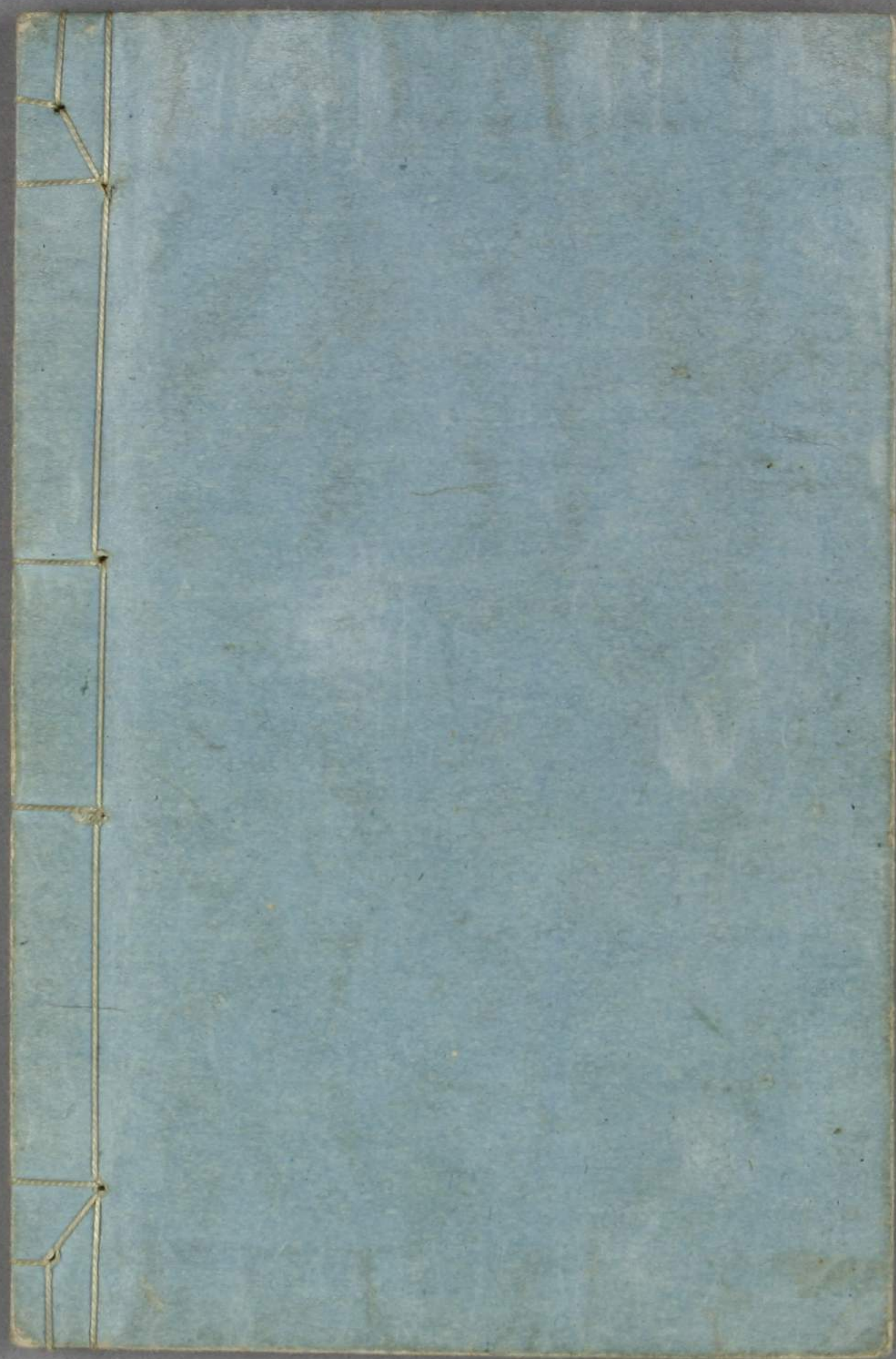
55

60

65

7





物集高見著

標註 世繼の歌

東京 金港堂書藉株式会社



世繼の歌の序

世繼の歌の註解は、とやう、人よも勧めら
れぬ、亦と思ひよちてハありし
を、行くと、さしあさりての事のまげき
よ、あつて、まよ、世繼の歌よりも、世繼千
辭文の方こそ、歌のさまも、いさゝりハま
さりてもあらめなども思ひなりて、いつ
書くべしとも無くてありしを、この頃豊

國の國東の里人、諸富貞治、出羽の田川の
里人阿部園吉などの、日本大辭林より
て註釋しつとて見せざるをみれば、歌も、
語も、おほやうの聞ゆるものうら、猶、その
註釋の立てやうの、いりにぞや思はるゝ
もあれば、ひとつふたつは、思ひよれるの、
言ひもし、直しもしされど、みながらう、老
の物うくて、さてやみつ。然らあれど、この
註釋の無うらましう、童部などの、つぶ

くと讀むらんよも、事の意の聞えがて
なるもありなましを、かくて、世繼のつ
ぎく、語り傳へ、讀み傳へんに、たよりよ
きにいふも更よて、二氏のいさをも、廣く、
久しくつとさとりなんものぞとよりし。か
くいふの、歌も、文も、手づゝなるもの、も
ぶもえあらで、あながちよ、人真似よ、この
えせ歌を作りさる物集高見。

明治卅年一月

例言

この歌は、天孫降臨よりこなた、明治維新よいらまでの事どもを詠せし歌よて、日本歴史をよみならえん兒童の爲よ、歴代の大勢をそらんせしめんとのすさびなり。

この歌は、余、十餘年前、世繼千辭文といふを作らんとせしほど、まづ、試みよ、辭數をもかざらず、同辭をもさけぬ、この歌を作りしを、その後、幾度ともなくそへもしけづりもして、終よ、かうさまよ

いふなきしなり。

この歌は用ひよる、五七一連の句數は、七百二十
二句にして、辭數は、大約、二千二百辭なり。辭句は、
文字鎖をもてつなぎ、或は、故事をもてつなぎと
るなどもあれば、みん人、心してみられようし。

明治廿七年十二月

目次

(一) 段 (國がさ
國ぶり)

(二) 段 (御代のもじめ

神武帝 鳥見の山

崇神帝 弓瀨のみつぎ、手末のみつぎ、

垂仁帝 埴輪

景行帝 熊襲梟帥

日本武尊 草薙の劔

成務帝 國郡のさうひ

(三) 段 (朝まつりごと

仲哀帝

神功后宮 三韓征伐

應神帝 文學
 仁徳帝 民のけぶり
 履仲帝 四方の筆
 允恭帝 衣通姫 甘檮のうけひ
 安庫帝 山の宮
 雄略帝 葛城山の獵、蠶養、
 飯豊帝
 顯宗帝 仁賢帝 室ほぎ
 武烈帝 歌垣
 繼體帝 磐井の亂
 欽明帝 佛をがみ
 崇峻帝 麻戸の皇子
 皇極帝 斑鳩宮のなげき 法興寺の蹴鞠
 (四) 段 難波朝のあさまつりごと
 孝徳帝 大化の政
 天智帝 朝倉の宮

弘文帝
 天武帝
 (五) 段 奈良朝のあさまつりごと
 元明帝 奈良の朝
 聖武帝 玄昉と廣嗣と
 孝謙帝 道鏡と押勝と
 稱徳帝 宇佐宮

(六) 段 平安朝のあさまつりごと
 桓武帝 遷都 將軍塚 延暦寺
 嵯峨帝 樂子の亂 橘皇后 うれへ文

(七) 段 藤氏の世のさま
 仁明帝 恒貞親王
 文徳帝 藤原良房
 陽成帝 藤原基經
 光孝帝 片川が行幸

宇多帝 遣唐使 賢聖の禿子
 醍醐帝 管家 寒夜の御衣
 朱雀帝 将門と純友と 經基と貞盛と
 村上帝 梨壺 鶯宿梅 内侍所
 冷泉帝 御璽の箱
 圓融帝 三船の風流 二人の關白あらそひ
 花山帝 弘徽殿の女御
 一條帝 紫式部 清少納言 藤原道長 平忠常
 後冷泉帝 前八年の軍
 後三條帝 華侈の禁 藤氏のさそぎ
 (八段) 院のまつりごと
 白河帝 僧徒の横行 北面の武士
 堀河帝 後三年の軍 五節の舞
 鳥羽帝
 崇徳帝
 近衛帝

後白河帝 保元の亂
 (九段) 平氏の世のさま
 二條帝 平治の亂
 六條帝 平清盛 三百人の童部
 高倉帝 小督局 鹿が谷
 (十段) 源氏の世のさま
 安徳帝
 賴朝 義仲
 平家の都落 一の谷の軍
 八島の軍 壇浦の軍
 鎌倉の幕府
 靜の舞
 曾我兄弟
 實朝

(十一段) 鎌倉執權の世のさま

順徳帝 西面の武士

承久の軍 北條義時 北條泰時

最明寺時頼 青砥藤綱

後宇多帝 蒙古の襲來

北條高時 田樂 犬鬪

(十二段) 吉野行宮の世のさま

後醍醐帝 笠置山

楠正成 蒙人形 雲のかけをー

大塔宮 般若寺の經箱

兒島高德 十字の詩

名和長年 船上山の軍

新田義貞 北條氏の亡

足利尊氏の叛

正成の戦死 長年の戦死 吉野の行宮、

金崎の軍 杉山の軍 義貞の戦死

後村上帝 楠正行

如意輪堂 四條繩手

(十三段) 足利氏の世のさま

北朝 室町

武家のさうえ

公家のおとろへ

天下一統

京都のさま 徳政 民のなげき

應仁の亂

鎌倉の將軍

北條氏 上杉氏

河中島の軍

毛利元就 陶晴賢

(十四段) 織田氏、豊臣氏の世のさま

天台宗 日蓮宗 眞宗のさまとぞ

織田信長 桶狭間の軍

明智光秀 本能寺の軍

豊臣秀吉 備中高松の軍
山崎の軍 賤ヶ嶽の軍
聚樂第のちりひ
征韓

(十五段) 徳川氏の世のさま

徳川家康 關ヶ原 方廣寺の鐘
淀君 大坂城
江戸の政略
朝廷と諸侯と
天草のさそぎ 天主教 種子ヶ島
東叡山の座主
後光明帝 由井正雪
徳川家綱の薨 酒井忠清
赤穂の義士
文學
大鹽平八郎

(十六段) 今の御代のもじめ

米國の軍艦 櫻田の變
七卿の都落 薩摩と長門と
鳥羽 伏見の軍
上野 箱館の軍

(十七段) 今の御代

王政復古
國のてぶり

世繼は、御歴代をいふ。されば、御歴代の歌といふ意にて、歴史の歌といふ義なり。

大日本國の國形は、細亞海に匍匐せる龍蛇の形に似て、動もすれは、大口を開きて、太平洋をも呑み、大尾を打りて、支那朝鮮をも打たんとする像あるに、この龍蛇の背の如き國にすめる人民は、いかたゞを居て、その數は四千萬人あり。この數を經て、今日にいたれるを、ちましを、今、語部の昔を語るが如く語りいでんとなり。大和島根は、日本國の總名にて、日

註標 世繼の歌

豊後 物集高見著

(一段)

大和島根の國形は、
 朝日夕日をさしげつゝ
 亞細亞の海を透蛇へる
 龍のみづちりくらかりみ
 頭をあげてあぎとをば
 太平洋ものみつべし

を捧ぐるは、真心をも
 て、君をいたゞけるな
 り。また、くちわかみ
 は、龍神にて、あざとふ
 は、魚の口を開きて動
 かすをいふ。また、語
 部は、むかし、大嘗會
 の時、諸國より、古事
 をかたる部民をいたし
 へり。事ありし、それをい
 へり。
 あなたに仰ぐ
 天地開闢の昔に仰ぐと
 いふ意にて、天孫瓊々
 杵尊の日向の高千穂
 の峯に天降り給ひしよ
 り、皇國の民は、貴賤
 となく、眞心をもて、
 君に仕へ來たれる者な
 れば、今、ゆくすゑも
 亦た然らざるべからず
 となり。浦安は、大日

本のまたの名にて、氣
 候よく、五穀ゆたかに
 て、人民の安穩にて住
 まるゝ國といふ意なり。
 首陀、刹利は、貴賤をい
 ふ梵語にて、匹如身は、
 無一物の者をいふ。さ
 れば、貴賤にかゝはら
 ず、何人もといふ意な
 り。くれはとりは、吳
 服と書きて、あやにか
 いる枕詞なるを、來と
 いふ語を兼ねしめたり。

筑波の山も
 蔭はあれど

尾^ヲをうごりして
 高麗^コ唐^マ土^モも
 龍^{タツ}の背^セにのる
 限^{カギ}りなき世^ヨを
 天^{スメ}皇^ラ命^{ミコト}を
 四^シ千^{セン}餘^ヨ萬^{マン}を
 四^シ千^{セン}餘^ヨ萬^{マン}の
 代^ヨ々^{カサ}を重^{カサ}ねて
 今^イのうつゝよ
 語^{カタリ}部^ベの
 さらり
 うちつべし
 民^{タミ}艸^{クサ}の
 志^シろしめす
 いさゞきて
 かぞへさり
 たみくさの
 こしりさを

かさるも遠^{トホ}き
 あなさよ仰^{アラ}ぐ
 高^{タカ}きひりりよ
 世^ヨを浦^{ウラ}安^{ヤス}よ
 首^ス陀^タも刹^{セツ}利^リも
 ひとつゝもてる
 君^{キミ}よさゝげて
 (二段)
 あやよ尊^{タフト}き
 三^ミ千^チ年^{トセ}を
 高^{タカ}千^チ總^ホの
 てらされて
 すむ民^{タミ}の
 匹^{スル}如^ス身^ミも
 眞^マこゝろを
 くれととり
 御^ミくらぬよ

筑波山は、常陸國の山
の名にて、古歌に「筑
波山このもかのもにか
げはあれど君が御蔭に
ます蔭はなし」とある
をもて、句を成せり。
この段は、神武天皇の、
檀原の宮の御即位の事
より、鳥見の山中にて、
皇祖天神を祭らせ給ひ
て、忠孝の道を教へ給
ひしを申せるなり。

富の小河の 瑞籬は
富の小河は、大和國の
河の名にて、厩戸皇子
の宮の跡なれば、天皇
といへる類にて、皇統
の、萬世に傳はれる意
にいへり。拾遺集にも、
「いかるがや富の小河
のたねばこそわが大君
の御名はわすれぬ」と

どよめり。この段は、崇
神天皇の御時より、崇
貢物を献る事となり
て、大宮は、いよく、
萬世にわたりての御さ
かねを籠め給ひしに、
垂仁天皇は、また、殉死
をとどめ給ひて、墳輪
とて、人形をもて、御
陵のめぐりに立てたま
ひなど、専ら、御仁恵の
事のみ多かりしかば、
人民は、不平の聲も立
てざりしに、何のわき
まへもなき頑民の熊襲
梟帥は、筑紫に騒ぎた
ちたりとなり。瑞籬は
崇神天皇の宮の名にて
蟀谷は、耳の上、眼皮
を見、まぶたなれども、
物を見る目つきを云へり。
こゝは、榮をこむへり。
いふにいひかけて、人

筑波の山も
御蔭かしてき
このもかのもよ
常磐堅磐よ
大御基を
富の小河の
宮のさかえを
耳よのきりで
居も定まらず
蔭のあれど
檀原の
茂りあひて
うごきなき
鳥見の山
瑞籬の
蟀谷の
眼皮の
そこびくる

四方のみつぎを
墳輪の人
御代の恵みも
海見さりくる
熊襲梟帥ら
餘波のさざぎ
閑野の小管
劍をとるり
駿河の野火
みさゝぎの
聲たてぬ
不知火の
くまつら
そく太刀の
さざくよ
鎌をなみ
草薙の
まめれども

民の、貢物を運ぶなどの拮据のさまをいへるなり。また、不知火は、常は筑紫の枕詞なれども、また、九州の地をもいひ、くまもとには、馬鞭草といふ草の名にて、くまそにかけたる枕詞なり。

閑野の小菅 鎌をなみ
この段は、日本武尊、熊鷹を征し給ひてのち、また、東國の賊を討ちたまたまに物したまひて駿河に火をかけた時、賊徒、野に火をかけたて、草薙剣をもて、草を薙ぎ拂ひて、向火をかけて、大風に遭ひたまひし時、御妃橘媛の入水したまひしを、御歸途、碓井峠にて、勢の能褒野まで歸りおはし、

御稜威ミイツのたふふ 海中ウミナカの
 吾妻アヅマのなげき たちのぼる
 煙ケリさびしき 能褒野ノボも
 きえぬ功績イサチの つきとつる
 楯タテと矛ホコとよ 道の志ミチり
 興オクのこほりの 山河ヤマカハも
 境界サカヒへまゐるく 筑紫ツクシ瀉ガタ

尊は、御身はかくれさせ給ひしかど、西征東伐の御功はかくれずして、成務天皇の御代にいたりてあらはれたりといへるなり。閑野の小菅は、神樂歌に「志づやの小菅鎌もて刈らば」とある歌句によりて、鎌のなれば、劔をもて、草を刈り給へりといへるなり。これ、歌の歌たるところにて、句法の妙、おぼろげの人の企て及ぶべきにあらざるなり。道のしり
 この段は、成務天皇の御時、東西の國々も、なごりなく治りしかば、山河を堺として、國郡を定められ、また、楯と矛とをもて、國造、稻置の職のあるしとせられしをいへるにて、神武天皇の御功業は、この御時に、全く成就せられしなり。さるは、かく、この御代に、物事の整頓せしは、日本武尊の西征東伐の御功によるなれば、その効のみゆといへるなり。道のしりは、國の末にて、奥の郡といふと同じく、東西南北、いづくのはてもといふ意なり。

この段は、仲哀天皇の御時、熊鷹、また、騷ぎ、たちしかば、天皇、筑紫にいでまじたりしに、そこにて崩御ありしかば、神功皇后、御柩を穴門の豊浦の宮に還り、まさせ奉り、御喪を秘

(三段)

志づむ夕日ユフヒを まもりつゝ、
 うらぶる船フネの うきぶらら
 八十ヤソ舵カチほさぬ みぎそよひ

し給ひて、三韓を征し
給ひて、八十艘の貢船
を得たまひしを申せる
なり。浮寶は、船の異
名なり。

ながれての世は、後世
世々につたへて

なごれての世は、後世
の事にて、鳥の跡は文
字をいふ。神功皇后の
御征韓の後、文字の來
たりしをいへるなり。
この段は、征韓の効、
文學を得たるにて、文
華の艶なるは、いふば
りなれば、皇太子の
御事は、文學の効に
はあらず。皇子の御天
性なりといふ意なり。
歌句のすべは、王仁
の歌とて聞ねたる。王
波津に咲くや木の花ふ

ゆびもり今を春邊と咲
くや木の花」とある歌
をもて作られたるなり。

高殿に

高殿は、仁徳天皇の御
事をよめる歌に「高き
屋にのぼりて見れば煙
たつ民のかまどはにぞ
はひにけり」とある歌
の、高き屋の事にて、即
ち、仁徳天皇の御上を
申せるなり。阿麻は、
籠の上の煙のか、
處にて、煙の縁より
でて、家々の軒を並
べて賑へるさまをいへ
るなり。また、ことわ
ざは言事にて、履仲天
皇の御時、諸國に、史
をおかれて、四方の言
事をあはれさしをいへ
るなり。

千々々の寶も
世々よつとへて
文のそやしよ
にほひえならぬ
おのぐこゝろと
今を春方の
かをりみちての
民のかまどの
にぎをふ疑煙も
なごれての
鳥の跡
さく花の
水の花の
ほこるぶる
高殿よ
けぶり出る
阿麻づとひ
かつちれが

空よつもれる
四方の筆よも
搔上の箱の
おつるう蜘蛛の
ゑるしゆりしき
宮また、すむ
ゆふべをぐらき
誓約かくさぬ
今にかへりて
ことわざの
か、りけん
くしうらよ
ふるまひも
藤原の
人やたれ
甘檮の
氏人の
欄干の

搔上の箱の

くしうらに

搔上の箱は、髮結道具の箱にて、櫛占は、櫛にてする占なり。この段は、允恭天皇の御時、衣通媛の藤原宮にて、天皇を待たせ給ひしを申せるにて、この時、衣通媛、天皇に待たせ給ひて、わがせこが來べきよひなり。蟹のくものおこなひかねてゑるしも、とよませ給ひしほど、天皇は、既に、おはしましてたゞ、ませ給ひたり。この歌に、たゞむ人やたれとあるはるなり。甘檮の誓約かくさぬて、允恭天皇の、姓氏の

みだれを正さんとて、盟神探湯の事ありし處なり。おぼしまは、櫛干にて、安康天皇の、山の宮といふ高殿にて、皇后と昔話し給ひて、皇后の御膝の上にて、御寝ませるほど、遂に、眉輪王に弑せられ給ひし事あり。されば覺めぬ夢とはよまれたるなり。引きかへしたる梓弓雄略天皇の、眉輪王を殺して、御位に即かせ給ひしを申す。また、葛城山の御獵の時、怒猪の事を、皇后の諫めたまひしを、皇后の諫めたまひしかば、御心なごみまて、後には、御獵もせさせ給はずなりて、専

眺望^{ナカメ} さびさる
むりしぐさりの
むすべる夢^{ユメ}の
ひきりへしさる
たむれバくるふ
いりりなごめし
今日の獲物^{モノ}と
山^{ヤマ}の列卒^{セツソク}の
ひく^{ヒク}の機^{ハタ}の
あやにしき

やまのみや
うさねよ
さめぬ世^ヨを
あづさ弓^{ユミ}
いりりぬの
言^{コト}の葉^ハを
かづらぎの
聲^{コエ}たえて
あやにしき

蠶^コ養^{ガヒ}いとなき
火^ヒ焼^{タキ}童^{ワラハ}の
振^{フル}之^ノ神^{カミ}楹^{スツ}の
おくれさきぶつ
まむしさゝふる
宮^{ミヤ}みぢほしき
鱈^{ヒレ}ふる鱈^{シビ}を
かるもの床^{トコ}の
まじざみざれて
むろほぎよ
うさひなす
もとすゑの
大^{オホ}殿^トを
角^{ツメ}刺^{ザシ}の
歌^{ウタ}垣^{カキ}よ
あさる猪^{イノチ}の
おきふしよ
常^{トコ}夜^ヨゆく

ら、農桑の業を勧め給
ひしをいへり。
むろほぎに
火燒童の

むろほぎは、新室の祝
にて、火燒童は、御事な
りと弘計王との御事な
り。この段は、二皇子の
の、播磨にて、火燒の
下部となりては、皇族
を、室祝の夜に、給ひ
なる由をあらはし、振の
しをいへるにて、
神榎もとするの、
皇子の、時の歌ひた
まひし歌句なり。
角刺の宮
角刺宮は、二皇子の、か
たみに、御位を譲りて
たはせし間、御姨の、大
豊尊の、志ばし、
政を聞召し、宮なり。

うの時人の歌に、大
和邊にみかほしもの
たぬみのこの高城な
る角刺の宮」といふ歌
あるをもて、句を成せ
り。

歌垣に緒ふる鮪を
て、立ち並びて、方
あひ歌をうたひて、遊
あそびをいふ。武烈天
皇、いまだ、皇子にて
たはせし時、この歌垣
にて、大臣平群、眞鳥の
子、鮪といふが、影媛
は、争ひて、無禮の事
りしを怒り給ひて、殺
たまひし事あり。この
段は、影媛などのよみ
たる歌句をもて作られ
たるにて、あわざみだ
れては、後に、天皇の

あぢきなき世を
ふさ、びてらす
磐井の清水
新羅の影も
善事悪事
ならひいぶせき
神のまうでハ
まきて守屋も
宮の殿戸を
三國山
天津日
かれえてて
うつらぬを
ゆきりえる
まらうどの
いなむしろ
金刺の
さしりねて

たてバひろ、ぐ
さ、ぐる幡
かさみてほゆる
薬なめさる
空よくるひて
雲のおましハ
繋ぎもとめで
のりか、げさる
もろき契りを
ひろむりり
きぬらさよ
蘇我の子ハ
馬なれや
みぶらをの
すさむれど
麿戸の
ひさご花
總角よ

三國山
天津日
かれえてて
うつらぬを
ゆきりえる
まらうどの
いなむしろ
金刺の
さしりねて
ひろむりり
きぬらさよ
蘇我の子ハ
馬なれや
みぶらをの
すさむれど
麿戸の
ひさご花
總角よ

御行状のあぢきなかりしをいへるなり。

三國山

ふた、びてらす

常世ゆくは、暗黒をい

ひ、三國山は、次の帝、

繼體天皇のおはせし三

國の里をいふ。天皇は、

この里より出でさせら

れて、御位に即かせ給

へり。

磐井の清水

かれはてて

この段は、繼體天皇の

御時、筑紫の磐井とい

ふが、三韓と通じて、謀

反せしをいふ。涸れは

てては、やがて治りし

をいへるなり。

客人の

神のまうでは

客人の神は、外國の神

といふ意にて、佛をいふ。

この段は、欽明天時の御時、

佛法の渡れるを、物部

守屋といふ人は、入れと否み、蘇我馬子といふ人は、

入れんとて争ひしをい

へるなり。いなむしろは、寢席にまゝむしろにて、

否むにいひかけたり。また、

金刺の宮は、欽明天皇の宮にて、ひろくは、立居さだまらぬをいふ。

守屋の、

拒ぎかねて、ひろく、ぎて、浚巡せるをいへるなり。

幡、きぬがさは、みな、佛

具にて、佛法の、門戸を排して入り來たるさまをいへり。

藥なめたる馬

この段は、馬子、守屋を滅して後、一人、權を専らにして、

はてには、崇峻天

皇をも弑し奉りしを、厩戸皇子は、憲法をも定め給ひながら、

馬子をば、さて

おかせ給ひしをいへり。むかし、仙人の藥を嘗めし犬は、

天をかけりて吠えた

りといへば、馬子も、仙藥を嘗めし事ありて、かくは、

空にくるひて、天位に

近づけるかといへるなり。みだらをは、馬の毛色の名にて、

雲のおましは玉座

なり。また、瓢花は、童子の髪ゆひざまにて、

厩戸皇子の御髪のみなり。

むすぶ宿世スグセの

さどれども

なく音ネかなしき

斑イカルガ鳩ガの

寺テラのささぼこ

とりしむる

人もなき世ヨを

蹴鞠ケマリの

阿利アリとよびさる

かゝりよハ

かゝれる履フツも

南ミナ淵フチの

鯨魚フカのあさびて

うらぶ瀬セを

ふめバかげろふ

日の殿ヒノミヤよ

入鹿イルカおぼるゝ

にささづみ』

奉りて、ろれより、親しく交りきこねて、南洲先生の許に、學問に通ふとて、ひとつ車に乗りて、遂に、蘇我氏を滅す謀をも定めたるをいふ、阿利は。鞠を乞ふ時よぶ聲なり。

鯨魚はあさびて

鯨魚は、入鹿の類の魚にて、入鹿は、馬子の孫なり。この段は、鎌足、皇子と、入鹿を、玉座の邊にて殺し、をいへり。庭たづみは、雨後の溜水の、庭に流る、をいふ。入鹿を殺して、屍を、庭に捨てたる時、雨のふりて、水のながれたるをいへり。

(四段)

子代御名代 垣の民
上世は、皇后、皇子などの、御名を、後世に傳へんとて、その御名をかけたる部民を立てられたる事ありて、それを、子代とも、御名代ともいへり。また、垣の民とは、領地にある

底^{ソコ}さへみえて ながれゆく
世^ヨのあらさまの 年^{トシ}たちて
子^コ代^{シロ}御^ミ名^ナ代^{シロ} 垣^{カキ}の民^{タミ}
とりく^{ソリ}ぎそふ からこるも

民といふ事にて、封建の頃の、國持大名の領分の人民の如きものなり。これらは、孝徳天皇の御時廢せられたり。とりく^{ソリ}ぎ^キそ^ソふ^フ唐^{カラ}ころも
孝徳天皇の御時、子代、御名代などを廢せられ、すべて、唐風にならば、給ひて、唐衣をも着せ、古來なかりし種々の規則を立てさせ給へり。されど、有名無實となれるなどもありき。

なれぬ御^ミ憲^{ケン}を つぎく^{ツギク}よ
な^ナの^ノる^ル誰^{タレ}が^ガ子^コ 朝^{アサ}倉^{クラ}や
木^キの^ノ丸^{マロ}殿^{ドン}よ た^タつ^ツ杣^{ソマ}の
爪^{ツメ}手^テを^ヲしなく ふ^フき^キす^スさ^サぶ
風^{カゼ}の^ノや^ヤど^ドり^リを 三^ミ吉^{ヨシ}野^ノの
春^{ハル}よ^ヨゆ^ユづ^ヅれる 志^シ賀^ガ櫻^{ザクラ}』

なれぬ御憲を つぎく^{ツギク}に
この段は、中大兄皇子、御位に即かせ給ひて、天智天皇と申し、時、筑紫の朝倉の木丸殿おはし、時の御歌をもて書けるにて、孝徳の御代の改新の政も、大かた、この君の御心より出でしなれば、なれぬ御憲より、この君に續けたり。また、御歌は、朝倉や木の丸殿にわがをれば、名のりをしつ、行くは誰が子^コ』さて、御子の大友の皇子は、天武天皇との御争ひありて、志賀山櫻と散りうせ給ひて、天武天皇は、吉野の花と榮えたまひしをいへるなり。爪手は、柚木の角の荒々しきをいひて、木の丸殿の荒木造をあしらひたるなり。

ふる事は、
この段は、奈良の朝の
有名なる古事を語り、
でんとするをいへり。
さて、
ろよ鳩鳥の
青丹よし

そよは、夫よと言ひい
だす語、鳩鳥は、青羽
の鳥ゆゑ、青といふ序
よ用ひ、青丹よしは、
奈良の枕詞なり。この
段は、佛法の時めく世
にて、すべて、浄土を、
この世に現在せるさま
なりといへるなり。浄
土とは、佛の居る世界
なり。
木綿付鳥も
わがごとく

この段は、呼子鳥とい
ふより、また、鳥をも
ていへるなり。木綿付
鳥は、木綿といふ布を
つけたる雞にて、世の
騒しきとき、四境の祭
とあるに用ふるもの
なり。さて、この時、僧
徒の跋扈にて、藤原廣
繼は、筑紫に逐はれて、
謀反して、肥前の松浦
にて殺され、押勝は、
近江の三尾にて、これ
り。謀反して殺された

高御坐山
かきくらし
この段は、弓削道鏡の
爲に、朝廷も、雲霧に
おほはれたるを、和氣
清鷹の孤忠にて、宇佐
神宮の神勅を奉りして、
天位を全くとし奉りしよ

(五段)

まがらむ瀬なく
ちる花の
たゞ雪とのみ
ふる事ハ
そよ、鳩鳥の
青丹よし
奈良の都を
毘盧遮那の
咲顔ときめく
大寺よ
佛法僧と
なく鳥ハ
迦陵頻迦の
こゑ妙よ
いける浄土を
呼子鳥

水綿付鳥も
まがごとく
憂きを松浦よ
えなされて
うらみを三尾よ
近江なる
高御座山
かきくらし
弓削の河霧
こむる世を
まをゆくてらす
天津日の
宮居かしてき
宇佐川の
世々よなられて
御手洗の
御裳濯川よ
すゝぎさる

り、平安の遷都をいへるなり。

影すゞしろの童部

すゞしろは、髻にて、童部の頭髪の頂に、剃りあましてあるをいふ。平安の名は、當時の童謡によりてつけられたるをもていへるなり。花心は、今やうの華々しき心をいふ。さきくさは、枕詞にて、上句の花を承け、後句の三葉にかけたり。古歌に、「この殿はうべも富みけりさき草の三葉四葉に殿づくりせり」とよめり。この歌句をもて、新都の大内裏などの御造営の宏大なるを述べたるなり。形代は、甲

胃を帯したる偶人の、新都の守護神として、東山にうづめられしをいへるにて、大比叡、小比叡は、叡山延暦寺の御創建をいへり。また、三昧、四蛇は、佛語にて、佛法の、人心の煩ひを休むるをいふ。毒木は、蝦夷人の用ふる毒の矢にて、治まるるといふは、遷都の後、田村麿將軍の、陸奥を平らげしをいへり。平城のむかしに、柏殿の嵯峨天皇の御時の、薬子の亂をいへるにて、薬子の亂をいへるに、御復位を勸め奉りしをいふなり。柏殿は、皇后の宮にて、

影すゞしろの
うさふ平安の
うつつるり人の
童部も
みやうつし
えなごゝる』

(六段)

春をまちえて
三葉四葉の
つくりかさねし
宮を守護の
かしくよるひて
さきくさの
どのづくり
九重の
形代
ひがし山

動きなき世を
小比叡よいのる
四蛇にかくれて
毒木をさまる
平城のむらじよ
戸樞の細乳
老もむらえて
ときめく春の
秋の嵯峨野の
大比叡や
三昧よ
陸奥も
君が代を
柏殿の
ほそりよる
薬子の
とくすぎし
和草の

藥子の、后位を得んと
 思ひしをいひ、乳の細
 りたりとは、藥子の、
 既に老いたるをいへる
 なり。また、老もわか
 ねては、藥子の若やぞ
 てなり。藥子は、平城
 天皇の、いまだ、太子
 にては、せしほど、
 の女の、官旨にて仕へ
 奉れりしに、おのれも、
 遂に、寵を蒙りしなり。
 藥子といふは、もと、
 元朝に、世御の屠蘇酒
 を奉る女の童の稱なれ
 ば、老もわかや、意は
 へあるをもていはれた
 るなり。
 秋の嵯峨野の
 和草は
 この段は、嵯峨天皇の友愛の御心とて、御子はありながら、御弟の淳和帝を立て給ひしかば、嵯峨の御子の仁明帝を立て給ひしをいへり。
 嵯峨 天皇の友愛の御心とて、また、嵯峨の御子の仁明帝を立て給ひしをいへり。
 淳和帝は、また、嵯峨の御子の仁明帝を立て給ひしをいへり。
 守部の庭に

もとのねざしを たづね来て
 末野よむすぶ 露玉の
 ぬきつらねさる たちをなを
 もりべの庭よ 枝折して
 おほしとてさる をしへぐさ
 青人草の あさごどよ
 御門よたつの 市なれや
 うるりあゆの子 あきなぐさ

橘をば、守部の枕詞なり。この段は、嵯峨の皇后、橘氏の、内助の徳をそなへ
 給ひて、常に、朝政をもあな、ひ給ひ、また、學館院を立て、橘氏の子弟を
 教へ給ひしをいへり。
 御門にたつの 市なれや
 この段は、嵯峨天皇の御時までは、猶、朝政といふ事ありて、毎朝、人民の、御門に
 参候したりしをいふ。また、この時は、穀倉院の米をいだして、人民を賑はし
 給ひしなどもあり。辰の市は、大和にありし有名な市なり。市といふより、
 うるかにかけてたるなり。うるかは、鮎の子の鹽漬なり。また、市といふより、商
 ふにかけて、秋名草といへり。秋名草は、殘菊の異名なり。

(七段)

うればは黄ばむ
 承和菊の
 前段の市をうけて、賣
 ればといへるなり。う
 ればは、末葉にて、殘菊
 にちなめるなり。この
 段は、仁明天皇の御時
 より、藤氏、やうく、
 外戚の權柄を執りしを
 いへり。承和菊は黄菊

うれをひきむむ 承和菊の
 下葉よかるゝ ひらげぐさ
 かゝるまいしも そらなくよ
 爪よ藍志む 漆殿の

にて、黄色は、仁明天皇の好ませ給ひし色なればいへり。日蔭草は、恒貞親王にて、親王は、一旦、仁明の太子とならせ給ひしかど、藤氏の爲に、日蔭に立ち給ひて、御代は、清和帝の御代となれり。染殿は、藤原良房にて、水の尾は、清和天皇なり。あいにしは、染殿にちなみたる詞なり。拾玉集に「うれもいさ爪に藍しむ物はりのあいにしと」りおく「襟姿よ」とあり。末は、藐姑射に「はふれつゝ、藐姑射は、太上天皇のおはす處にて、清和帝の御子の陽成天皇の

基經に透れて、上皇となり給ひしをいへり。なげ木こりつむ。この段は、光孝天皇の、藤氏を厭ひ給ひて、嵯峨帝の御跡を思ひて、芹川の行幸ありしをいへり。光孝天皇は、まへり。小松の帝とも申せり。古歌に「さがの山みゆき絶えにし芹川の千代の古道あとはありり」り」とよめり。すゞろなる。この段は、宇多天皇の御時、菅原道真の遣唐使を止め申し、をいへり。また、和魂漢才は、昔公の御詞にいでたるをとりて、天皇を稱へ申し、なり。亭子

ひらりをあふら
こゝよむすびて
末ハ藐姑射
なげ木伐りつむ
水ハあせさる
たゞ藤波の
みどり争ふ
千代の古道
いっつり昔

かねごと
水の尾の
とふれつゝ
芥川の
岸づとひ
さむぐ世
小松原
とめて来て
をちりへる

行幸の跡の
尾ぶさの鈴の
道よいでぬ
やまと心も
かねてめでさき
たつる障子の
よきをへごてぬ
聖の御代の
まづらよつもる

小鷹狩
すゞろなる
菅原や
漢才も
亭子院
賢聖の
いにしへの
かげみえて
雪もよの

院は、すなはち、宇多天皇なり。

雪もよに

この段は、醍醐天皇の、寒夜に、曾民の上をおぼして、御衣を脱がせ給ひしをいへり。

御衣はこゝに

あるものを

この段は、前段の御衣を兼ねて、また、昔公

の詩句にかけたり。昔公

の詩は、去年今夜侍清

涼、秋思詩篇獨斷腸、

恩賜御衣今在此、捧持

毎日拜餘香、たれ濡衣を

この段は、昔公の、讒

言をうけて筑紫に貶され給ひしをいへり。

九月九日の前

なれば、きせわたをい

へり、きせわたは、菊

の上におほふ綿にて、

耳無草、秋しく、みな、

菊の異名なり。

猿島にさけぶ

この段は、將門、純友

の亂をいふ。夜鷹は、

鴟梟の類の凶鳥なり。

猿島は將門の偽宮を建

てし地なり。

ふかき水量は

みなもとの

この段は、源平二氏の、

將門、純友の亂を平げ

しより、勢力を得しを

いへり。みなもとは、

源基經にて、益荒雄は、

平貞盛なり。

梨壺に 詞の花の

さむきこの夜を

いうにして

まづしき民の

ありすると

冬の夜床よ

ぬぎすべし

御衣のこゝよ

あるものを

たれ濡衣を

きせわたの

きくひいなく

耳無草

きろねバかをる

あきしくよ

去年の今夜を

おもひねの

夢さむらしき

折しもあれ

猿島よさけぶ

ふくろふの

枯聲すごく

つとへきて

夜鷹友よぶ

伊豫の海

ふりき水量の

みなもとの

よすがとなるり

なりりぶら

やとよびうけし

益荒雄の

弓弦のひゞき

たりけれバ

敵をたひらの

あらましも

かねてきこえし

天慶の

村上天皇の御時、禁中の梨窟に、五人の歌仙を召されし事あるをいへり。五人は、大中原能宣、青原元輔、源順、紀時文、坂上望成なり。この段は、梨窟の歌仙よりちなみて、鶯宿梅をいへるなり。鶯宿梅は、村上天皇の、人家の梅を堀らせんとし給ひしに、女の童の、歌よみていだし、かば、さて止み給ひし故事なり。この歌は、一勅なればいと問はし、かか、宿はと問はし、いか、たへん、櫻にかゝる

みどれも今ハ
 詞ハの花ハの
 春をたづねて
 宿ハと問ひし
 櫻ハよかゝる
 影もまゝく
 主殿察ハよ
 率分堂ハの
 くらしとかこつ

梨ハ壺ハよ
 にはへばり
 うぐひすの
 梅ハならぬ
 御ハかゞみの
 たいまつハ
 てるものを
 草ハぐくれ
 人ハあれど

この段は、冷泉天皇の、御狂病の氣にて、神鹽の箱を開かんとせさせ給ひし事あるをいへり。ひかりは、なごて、たてわびし

この段は、村上天皇の、冷泉帝の嗣を立てさせ給はんとせしを、藤氏の爲に制せられ給ひしをいへり。

詩歌管絃の
 風流士は

この段は、圓融天皇の、大井川に行幸の時、詩歌管絃の三船をうかべて、御遊ありしをいひて、次句の二人の喧嘩を喚び起し、なり。

御稜威ハまるく
 箱ハの雲霧ハ
 ひかりハなごて
 詩歌管絃ハの
 ミツの御船ハよ
 フタリ人ハあらそふ
 星ハの位ハの
 あくられいでし
 むすびもあへで

御ハ壺ハを
 きえん世ハの
 たてむびし
 風流士ハハ
 むつべるを
 サン台ハの
 くらき夜ハ
 たまむすび
 花ハ山の

人は、藤原兼道と兼家
とにて、關白の職を争
へり。

あくがれいでし
たまむすび

この段は、花山天皇の、
弘徽殿の女御のうせ給
ひしを歎き給ふほどに、
藤原道兼にあざむかれ
給ひて、夜半に、宮を忍
び出で給ひて、出家遁
世し給ひしをいへり。
たまむすびは、伊勢集
に「思ひあまり出でに
し靈のあるならん夜ぶ
かくみねばたまむすび
せよ」ともよめる如く
にて、女御のあくるがれ
いでたる靈を結びと
めんの御志わざなりと
なり。
花はちりたる
一條に

花山帝は、かくて止み
給ひしを、次の一條天
皇の御時には、中宮彰
子、紫式部などの有給
て、女房も仕へ奉り、同
少納言仕へ奉れり。清
て、藤原は中宮にて、
ひめかみは、草の名
にて、徐長卿をいへる
を、こゝには、紫式部
の、婦徳を具へたるを
兼ていへり。また、雪に
かへしは、清少納言
の雪の朝のあわざをい
へり。御簾山は、紀伊
國の山の名にて、西行
集にも、「待ち來つる
やがみの櫻さきにけ
り荒くおろすな御簾の
山風」といふ歌あるよ

花のちりさる
ひとりかゞやく
色よちなめる
ゆりり深野の
雪よかゞげし
おろしの風よ
あふげばたりき
みちさる影の
榮花もこゝよ
いちじょうよ
藤壺の
むらさきハ
ひめろゝみ
御簾山の
雲をれて
もちづきの
まとりなる
いざよひて

たちまちぬまち
弓張月ハ
かさよりかくる
みるめあれさる
駒の淺瀬よ
かへさりとほき
外の濱萩
吹雪よむせぶ
みざれ年へて
ふしまちの
ひんがしの
總の海
落星の
いむえつゝ
陸奥の
をれりへり
鳥の海
ほころびし

り、次句を喚び來たれり。

あふげば高き

この段は、關白道長の、榮花を極めての歌に、「この世をばわが世ぞ思ふ望月のかけたる事もなしと思へば」といふ歌によりて、句を成せり。さて、こゝは、藤氏の榮花も極りて、遂に、下總に、平忠常の亂ありしをいへるなり。さよよひは十六夜、たちまちは十七夜、あまちは十八夜、ふしまちは十九夜の月よて、望月も、やうく、闕けて、弓張月となれるをいへり。

みるめあれたる

落星の

ころものたての	繇毛よも
車 <small>クルマ</small> の色 <small>イロ</small> ハ	みえぬまで
御代 <small>ヨ</small> の光 <small>ヒカリ</small> の	かゞやけバ
まじろきあふぐ	まむゆさよ
春日 <small>カスガ</small> の神 <small>カミ</small> を	おらべども
大織冠 <small>タイシヨウクワン</small> の	たましろハ
おのれくだけで	ふぢそらの
末葉 <small>ウラバ</small> まなゆる	多武 <small>タム</small> の峰 <small>ミネ</small> 』

この段は、源頼信の、忠常を攻めんとて、馬に騎りて、海をわたりしをいへり。

外の濱荻

この段は、後冷泉天皇の御時、安倍頼時の陸奥の亂をいへり。この時、衣川の戦に、義家、貞任を追ひて「衣のたては綻びにけり」と讀みかけたるに、貞任、ふりかへりて「年をへて糸のみだれのくるしさに」とつけたる句をもて、詞を成せり。

車の色は

この段は、後三條天皇の、華修を禁じ給ひて、京中の車の飾をとりせ給ひしをいへり。天皇、藤氏の擅横を惡み給ひて、まばく、これを押へ給ひしほどに、一日、關白教通、大聲に叫びて、春日の神威も盡きたるなり。藤氏の公卿、こゝろく、朝より退くべしといひし事あり。また、多武の峰の大織冠の像も、次の帝の御時、永保中に壞れたる事ありて、藤氏の、やうく、衰へしをいへるなり。

峠に立ちて

おこなふや

峠は、多武の峰といふより因み來たれり。優婆塞の修業には、峠に立つ事もあり。この段は、白河天皇の御時、延暦寺、園城寺などの僧

(八段)

峠 <small>タウゲ</small> よたちて	おこなふや
優婆夷 <small>ウパイ</small> 、優婆塞 <small>ウパソウ</small>	うむぐちの
法師 <small>ホウシ</small> がすげむ	くちさきも

徒の暴行ありしをいへ
 なるなれば、すべて、佛
 家の事にちなみて、句
 を成せり。また、姥口は、
 老人の齒のすきて、常
 に、口の開きたる様に
 てあるをいふ語なり。
 されば、老僧どもの、
 常に、口物を尖らして、
 紛争して止まざるをい
 ひ、また、人靈の眞青
 なる君は、萬葉集の歌
 に出でたるを、雨をい
 はん序におきたるなり
 その歌は、「人靈のさを
 なる君がたひと逢
 へりし雨夜は久しとお
 もほゆ」また、雨は、
 法勝寺に御幸あらんと
 せしに、あはく降り
 しかば、獄に入れ給ひし
 入

三
 山寺の
 もえとてバ
 ひとごまの
 きえぐてよ
 つなぐれて
 堀河の
 まうせつ
 金澤の
 みぐるれと
 業火の炎
 こごままたぐふ
 眞青なる君も
 雨の獄舎よ
 名のみならるゝ
 世を白河よ
 よどめばにぐる
 田面の雁の

事あるをいへり
 名のみながるゝ
 堀河は
 この段は、白河上皇の、
 院政を行ひ給ひし故
 に、堀河天皇は、名は
 かりにおはせしをいひ
 て、次句の、同天皇の
 御時の亂をいへり。
 よどめばにぐる
 金澤の
 堀河天皇の御時の、清
 原武則、家衡等の亂を
 いへり。田面の雁は義
 家の、行雁の亂れたる
 を望みて、伏兵のある
 を悟りしをいひ、甲乙
 は、義家の、勇法の、
 座を設けて、將士を勵
 し、をいへり。こは、
 古歌に、「陸奥の十布
 の昔も七布には君を
 志なして三布にわれね

十布の菅薦
 きそふ席の
 志が弄丸の
 白珠璣
 これやいふこと
 背よみさる
 武士のすぐめり
 五節よりさふ
 思ひあがりし
 三布七布
 甲乙の
 志なさどめ
 日給の
 睨りけて
 北面の
 伊勢平氏
 公達の
 空目よも

「ん」とある歌によりて、句を作れり。

志が弄丸の
あなさだめ

品さだめは、甲乙の座の定めにて、弄丸をいへるは、次句の珠をいせん料なり。白珠、璿は、みな、次のひだまひを喚び起す句法なり。この段は、藤氏の公卿、平忠盛を侮りて、五節の夜に、伊勢平氏はすがめなりと歌ひし事あるをいへり。忠盛は、眇にて、伊勢に居たるに、伊勢よりは、酢甕をいだす故に、かく歌ひて嘲りしなり。また、日給の簡は、殿上人の名をあるせる簡にて、忠盛も、昇殿をゆるされ

たれば、この簡のあるべきなり。

翅はみねぬ

鳥羽、崇徳の兩御代は、白河上皇、猶、院政を執り給ひしかば、兩帝は、天を飛ぶ翅も無きが如くにて、いたづらにておはせしをいへり。天の逆手も

この段は、美福門院、近衛帝の崩御をもて、崇徳上皇の呪詛ならんと疑ひて、鳥羽上皇に讒奏せしより、事おこりて、遂に、保元の大亂となりしをいへり。逆手は、呪ふ時のあわざにて、朱器臺盤は、大臣の大饗に用ふる器なり。また、とりばみとは、大饗の残米を、鳥などに與ふる事あり

鳥羽崇徳

翅のみえぬ
天の逆手も
誰の近衛を
朱器臺盤の
まの雌鳥羽よ
あさりらねさる
右よ縶羽の
おどろしき世を
音よきてえし
鳥羽崇徳
うさなくよ
のろふべき
とりをみも
おほされて
雄鳥羽の
よぢれさる
かぶらやの
保元

弓雄がさけぶ
遠方の

火もかなさより
たくぶすま

白河殿よ
なぐるれば

けぶりよあへぐ
火食鳥

恨みそのみて
讃岐のや

志度るもどろよ
よぶ聲の

見なしうれさる
世の中

た弓取よ
ひられさる

て、それをいへる詞なり、雌鳥羽、雄鳥羽は、美福門院と、鳥羽上皇との御事に
にて、雌鳥羽は、左より、右に向ひ、雄鳥羽は、右より左に向へるよし、和名抄
にみねたり。

かぶらやの 音にきこぬし
この段は、保元の亂に、源為朝の、今夜、皇居に、火を放ちて攻めんといひし
を、謀もちひられずしてありしに、遂に、かへさまに、火をかけられしをいへ
り。たくぶすまは、白河にかゝる枕詞なり。

この段は、白河殿の、火をかけられて、遂に、崇徳上皇も、讃岐の志度にいで
ます事となりて、世は、やうく、武人の世となりしをいへり。

(九段)

兒の手がしはは、柏の
ふたおもて
一種にて、ふたおもて
は、世の、武人のま、
に、兎にも角にもなる
をいひて、次句のひと
つといふ語を喚べり。
すべて、この段は、平

兒の手がしはは、ふたおもて
鐘ひとつを
なにくらうしろを
關の童子が
かへさまよ
さぐりの
手よとるや

清盛の専横をいへるな
り。うしろを憚るとは、
清盛、誤りて、鎧をか
へさまに着ながら、負
け心にて、君を、後
にせぬ心ばへなりとい
ひし事のあるをいひ、
關の童は、清盛の、己
を評せん者を執へんと
て、二百人の童子に、赤
袴をさせ、梅の枝をも
たせて、京中をあるか
せしをいひ、紅葉をり
たくは、高倉天皇の、仕
丁の、紅葉を焼きし罪
を免し給ひしをいひ、
想夫戀は、小督局の、嗟
峨野の隠家にて彈せし
琴の曲なり。
かこつゆの手も
あはのばれて
ゆの手は、琴を彈ずる

鳥柴ハ梅り
紅葉をりさく
人ひととがめぬ
さらまをたつ
かこつ左の手も
秋野よおつる
かるくもらるゝ
聲もくごもる
平氏たふると
松ならぬ
御園生の
この君も
想夫戀
まのむれて
松風
伊波胡春よ
まゝら谷
よぶ聲の

時の、左手の、弦をおさふる手なり。また、秋野、松風は、昔の琴の名にて、いはこそすは、琴柱の、緒のあたる處なり、されば、聲のむせぶゆるよ、次句の鹿が谷を喚びおこせり。

この詞は、鹿が谷の俊寛の別荘にて、平家を滅さんと議せしとき、成親のいひし詞なり。人の、みな知る事なれば、その由はいはず。

(十段)

あな戴星馬は、馬の毛色の名、この段は、源氏の起りしをいへるにて、宇治河は、頼政の、子の、仲綱の、馬の事よりして、宗盛と争ひしをもて、遂に、宇治河にて戦死せしをいひ、はなちどりは、頼朝にて、伊豆よ、流人となりたるが、頼政の事よ

あな戴星馬ハ 宇治河の波をかづきて いわもなり 蛭小島の となちどり よむざらん 宿鳥おびゆる 富士野川

りして、宣旨を得て起りしをいへり。世をせばめたる 六波羅の

この段は、平家の義仲に逐はれて、京を出でて、西海に漂ひ、遂に、義経に攻められて、壇の浦にて滅びしをいへり。天台山は、叡山にて、義仲の、京を望みたる處、四季の御所は、嘗て、清盛の、福原にありし時かまへたる處なり。また、四季といふ語より、月花の句を作り、月花といふ語より、次句の梅と日とを喚び起せり。また、矢さけびは、矢を射て、物にあてたる時、手ごたへの響きに答へて呼

特牛くるへる 俱利伽羅谷 世をせむめさる 六波羅の 榮花の夢を おどろろす 天台山の ときのとゑ 夕日をおくる 福原の 舊都さびしき 四季の御所 花さく春よ こごりへる 月の御船ハ うりべねど 三草おろしの ふきさてが

拾遺集に「いははししのよるのちざりも絶ぬべしあくるわびしき葛城の神」とよめるが如し。また、ちざりは、機^{ハタ}の道具に、ちざり^{チザリ}（膝）といふ物あれば、るれをも兼ねて、次句の機物をあしらへり。

倭交手纏は、倭文布を織る糸の巻きたるものなり。こゝは、靜御前の、頼朝にあひられて、白拍子の舞をかなでしをいへるにて、この時、靜の「ちづやちづ賤のをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな」と歌ひしことあり。なしうちは、烏帽子の名にて、男舞は、白拍子の舞をいへり。また、まひのかしら（雲冠）は、舞樂する人のかぶりものよて、みな、舞につきていへり。

あしのかろびて をどりさる
富士の裾野の そらうらひ
あそれとみずや 鶴が岡
千歳をこむる つまぐしよ
としなくかゝる おちがみハ
主なき宿を うらへてう』

兄弟は、曾我の兄弟にて、頼朝の富士野の狩の時、父の仇、工藤祐經を討ちしをいへり。

千歳をこむる つまぐしに
千歳は、前句の鶴といふ語より來たれり。この段は、寶朝の、鶴が岡にて、公曉に討たれしをいへり。寶朝、この日、任大臣の拜賀の禮を、鶴岡にて行はんとして、髪を梳らしめし時、ぬけおちたる髪をとりて、戲に、形見なりとて、かたへの者に與へし事あり。また、庭上の梅をみて、「いでゆかば主なき宿となりぬとも軒端の梅よ春をわするな」とよめりしをもて、こゝに、主なき宿といへるなり。

(十一段)

占にいでたる 龜菊に
この段は、承久の亂を
いへり。占にいでたる
は、龜といはん枕詞に
て、承久の亂は、後鳥
羽上皇の、龜菊といふ
女に、莊園を與へんと
せしより起れり。上皇、
北條義時を滅さんとお
ぼして、鍛冶を召し
て、刀を作らせ給ひし
事あり。また、北面の
武士にむかへて、西面

占よいでさる 龜菊よ
露のめぐみを かけまびし
なげ木もたてる 吉備の山
鍛冶がきさふ くるがねの
かさきひひらし 西面の

の武士をもおかれたる
 事あり。この亂に、泰
 時、京を攻めんとして、
 一旦、鎌倉を發ちしに、
 また、立ち歸りて。も
 し、上皇の、兵を率て
 おはせんには、臣とし
 て、君に敵すべきに
 あらねば、いかすべ
 きぞと、父の義時に問
 ひしに、義時、多ばし
 黙然たりしが、もし然
 らんには、降参の外な
 からんといひし事ある
 をもて、こゝに、君は
 あたまぬといへるな
 り。また、虚石花貝は、
 石花貝といふ貝の殻に
 て、上皇の軍の効な
 りしをいへり。
 からき宮居を
 隠岐の海に
 承久の軍の爲に、後鳥

武士よのそむく
 君のあたまぬ
 軍むなしき
 からき宮居を
 新島守ら
 あらき波風
 松の火影よ
 ひろふう銭の
 なられゆく瀬も
 東夷ぶに
 承久の
 虚石花貝
 隠岐の海よ
 守りむびし
 なごむ世を
 てらしつゝ
 なめり川
 さごめなき

羽上皇の、隠岐に遷さ
 れ給ひしをいふ。上皇
 の、隠岐にての御歌に、
 「われこゝは新島守よ
 おきの海のちらき波風
 心して吹け」とよみ給
 ひしがあるより、この
 邊の句を成せり。
 松の火影に
 てらしつゝ
 これは、青砥藤綱が滑
 川の事にて、銭の滑川
 の、銭の裏面を、なめ
 るといふ故といへるな
 り。この段は、北條
 氏の執政の效と、蒙
 古の事をいへり。
 行脚は、時頼をいひ、
 はやり雄は、時宗をい
 ふ。時頼は、諸國をめぐ
 りて、民の疾苦を訪
 ひて、時宗は、諸將に命
 じて、蒙古の兵を逐ひ

行脚がくる
 露もかゝりて
 水穂よすぶく
 高句麗蒙古の
 引板のかけな
 吾妻よさけぶ
 そやりごころハ
 暴風ふきまふ
 雲もらぶまく
 よしあしよ
 たのみなる
 小雀の
 よせぬいと
 鳥がなく
 そやり雄の
 まづむれど
 博多の海
 うづしほよ

攘へり。たのみは、稻
 の事にて、水穂にちな
 み、小雀は、蒙古にたと
 へて、次句の、引板、鳥
 が鳴くにむかへたり。
 うづしほは、渦まき潮
 にて、柁は、船ぼたを
 いへり。また、劔のた
 がみは、劔の櫛にて、
 こゝは、詳將の勇戦に、
 劔の櫛も振りつぶすべ
 き様にありけんをいへ
 るなり。また、ひらぶ貝
 は、貝の名なれども、
 こゝは、蒙古の兵船の、
 風波にくたかれて、拾
 ふべくもあらざるなり
 て、海邊に流れゆられ
 てありけんをいはんど
 ての詞に用ひしなり。
 綱手むなしく
 かこつ世を

ひろるゝ波の
 柁よたつや
 とりよとりさる
 つるぎのたぐみ
 ひらぶ貝なき
 海松なぎさよ
 から艦から檝
 綱手むなしく
 思ひあさびし
 とどめきて
 益荒雄が
 たぢららよ
 ひしぐれど
 浦づとひ
 浦づとひ
 ぬられくる
 から小船
 かこつ世を
 小石川

綱手は、船を引く綱な
 り。こゝは、綱手のた
 のみも絶えたる如く、
 北條高時の暴威にまへ
 たげられて、民どもの、
 苦みでありしをいふ。
 この時、高時、田樂と
 鬪犬を好みて、犬を、
 輿にのせて、人にか、
 せなどしたり。さら
 は、田樂の道具にて、
 高履子は、高き足駄な
 り。けいゝは、昔聞
 集にみえたる犬のな
 く聲にて、犬くひは、
 犬を食ひあはする遊戯なり。
 みねぬといへるなり。さて、
 御覽じて、すなはち、笠置に
 雨後の月は、よく、かさ(暈)

さゝら掻き鳴す
 法師がさける
 けいゝとなく
 ものぐるほしき
 日影もみえで
 笠置よまづむ
 田樂の
 高履子
 いぬくひの
 ならめよ
 月の着る
 雨雲

(十二段)

ながめは、長雨を兼ねていへり。されば、日影も
 後醍醐天皇は、鎌倉の政の、やうく亂れたるを
 御覽じて、すなはち、笠置に
 雨後の月は、よく、かさ(暈)を着るゆゑに、笠置にかけていへるなり。

またわきのぼる
山の岫
この段は、後醍醐天皇、
笠置に出でまして、楠
正成を召されしかば、
正成、謀をめぐらして、
あはく、東軍を破り、
遂に、天皇の、隱岐よ
り還幸の御路を開き、
自ら、兵庫に出でて、鳳
輦を迎へて、御先導に
供奉せしをいへるなり
西鳥、東魚は、正成の
讀みし未來記にある語
にて、おもかげうかぶ
は、正成の、千窟城な
どにて、東軍を破りし、
うのかみの艱難を思ひ
いづれば、當時の俣も
浮びてみゆとなり、當
く、先づいひて、當時
の事どもを、次句に述
べんどの、作者の用意

まことまきのぼる
千窟よさうつ
東魚ついでむ
たれうちぎりて
隱岐の島山
行手よなびく
君が御楯と
秋をたむけて
なぐれいざなふ
山の岫
西鳥の
あたましの
未來記よ
いでましの
草も木も
たちつづく
菊水の
鳳輦の

なり。

般若の箱の

この段は、後醍醐天皇
の、還幸以前の事ども
をいへるなり。般若の
箱は、大塔宮の、般若
寺の經箱の中に隠れ給
ひしをいひ、あまがつ
は、被具の人形にて、
正成の、叢人形の謀を
もて、東軍を欺きしを
いへるなり。また、雲
のかげはしは、東軍の、
千窟城に攻め入らんと
て架けたる梯にて、正
成に懸かれたるをいへ
り。また、十字の詩は、
兒島高德の事にて、船
上は、名和長年の事を

おほうちやまよ
面影うりぶ
見えみ見えすみ
般若の箱の
人うあらぬり
つらぬし葉よ
雲のかげとし
あやふまれつゝ
十字の詩の
のぼれども
こしうこの
おぼつらな
うごめくり
あまがつら
ほごされて
ふみまよひ
杉坂よ
かきながら

いへり。また、松の煙は、長年の船上にて、近國の大名の紋所を、松をふすべし。旗にかきしをいへり。

この段も、天皇の還幸以前、鎌倉に攻め入り、貞の、鎌倉を滅したる、北條高時を滅したる、りしをいへり。

延元の弓矢またとる

この段は、鎌倉にびて、天下、一日は、静謐に歸したれども、延元より、足利尊氏の謀反なり。この時、正成、尊氏を避けて、叡山に、行幸の謀を献じたりし

かども用ひられず、遂に、兵庫にて討死せし。かば、後に、叡山に行幸もありしかば、時におくれて、その効もなくて、尊氏は、いよひたり。

雲霧の縁へだつる

縁へだつるは、次句の、千重、九重をいはん序なり。この段は、尊氏、京に攻入りしかば、官軍、多く敗れて、中興の功臣たりし、三木一草の人々も、次第に戦死して、皇威のやうく、衰へゆけるを嘆きしなり。三木一草は、太平記の語にて、楠、結城、名和、千種の人々を

足一文字
夜よのりてゆく
御方を松の
畫ぐる旗の
風よいたへで
稲村が崎
炎をおくる
葛西が谷の
耳よのこりて

ふみなして
船上
けぶりもて
いろくさも
なびきよる
まほひれば
由比の濱
叫喚も
かしましく

なりとよむ世よ
弓箭まよとる
みやこの春ハ
柳さくらを
錦おりなす
風よまりせて
人のこゝろの
とをよたよふ
登るとかひハ

さらがへり
延元の
甲冑の
こきまぜて
とさあしの
をれりへる
うき雲ハ
比叡の山
みえぬ世を

いふ。名和は、伯耆の
人なれば、木の音にて
敷へしなり。

う木にまじれる
すめろ木を

この段は、後醍醐天皇、
尊氏の請によりて、一
且は、京に還幸ありし
かども、また、潜かに、吉
野にいであしたるを、
吉野法師の守護し奉り
しより、義貞の、越前
にて討死せしをいへる
なり。金が崎は、越前
にあり。義貞の、皇太
子を守護して、居し
城にて、この時、足利
高經に圍まれて、援兵
を、山に支へられて、
山も、援兵をたぐる事
にあはざりし故に、
水乞鳥の鳴きかこ

はすといはれしなり。
卧龍の夢は、義貞、高經
を、藤島に攻めし時、
し夢にて、おのれは、龍
となりて、地に臥し、
高經は、みて驚き走れ
りといふ夢なり。水練
栗色は、義貞の馬にて、
夢みし翌日、つけずま
ひして、水に入りて、
義貞、遂に戦死せり。
つけずまひとは、馬の、
狂ひてすまぬをいふ
語にて、みな、太平記
にみえたる、この時の
語なり。

ゆきもやられぬ
陸奥の

この段は、源顯信、結
城宗廣等、義良親王に
扈從して、再び、官軍を
催促せんと、海路より、

かねてかくとや
らき瀬またちて
かへらぬ道よ
仇波さむぐ
緑へどつる
千重かさなりて
みえずなりゆく
まさふきすすぶ
あらそひりねて
みなと河
ゆく水の
ありさてバ
兵庫の海
雲霧の
九重の
くらまざれ
水枯を
都方よ

たてる三水
今のこらぬ
う水まじれる
おほしさてさる
吉野法師ら
まづつきならす
まごちの鮒の
側見よあらぬ
水乞鳥の
一草も
世の中の
すめる水を
大和のや
僉議よも
金が崎
あざとひを
松山よ
なきらそす

陸奥に向ひしに、天龍
 洋にて、颯風にあひて、
 船ども、ちりくぐりにな
 りて、宗廣は、伊勢の安
 濃津に吹き送られて、遂
 遂に、そこに病死せし
 しをいへり。宗廣は、孤
 老年の人にて、その孤
 思、松の操あるに似た
 るをもて、翁草を呼び
 なしたり。翁草は、松
 の異名なり。翁草は、松
 松の常盤に色かへぬ
 語なり。この段は、楠
 正行の、櫻井の遺訓を
 守りて、吉野の行宮を
 守護し、遂に、高師直
 と、四條繩手に戦ひて、
 討死せしより、官軍の、
 いよしく、哀へゆきたる
 をいへり。ちよとはな

かぬとは、衰虫は、ちよ、
 と鳴くと、清少納言の
 いひしかど、遺訓を守
 れる正行は、涙は、袖
 にあふれても、父を尋
 ねては泣かずとなり。
 衰代衣は、たゞ、衣と
 いふに同じ。如意輪は、
 寶珠をもてる観音にて
 如意輪堂は、その観音
 の像を安置したる堂な
 り。また、心にかけて
 は、正行の、戦死を決
 して、如意輪堂の壁に、
 今度討死すべき人の姓
 名と歌とを書きたるを
 いふ。うの歌は、一かへ
 らじどかねて思へは梓
 弓なき数に在る名を
 とむるにて、寄方の
 水は、観音堂などの傍
 にある手水鉢の水をい

聲コエ うらさびて
 秋アキ はさりえぬ
 卧クワ 龍リョウ の夢ユメ の
 水スイ 練レン 栗毛クリゲ の
 也ヤ きもやられぬ
 船フネ よもそよぐ
 安濃津アノツ のいづこ
 つひよさめねど
 松マツ の常磐トキハ よ
 いろかへぬ
 陸ミチノ 奥ノ の
 仇アタ の風カゼ
 船フネ 酔エヒ の
 おきな艸クサ
 藤フジ 島シマ よ
 さめならら
 つけすまひ
 加れらとの

名ナ もかぐろしき
 孫ヒコ 枝エ のほふ
 花ハナ のすぎよし
 庭ニハ の教チシ の
 ちよとひなりぬ
 衰シロ 代シロ 衣ヨロモ
 せくとひすれど
 まがらみりねて
 そよや、如意輪ニヨイリ が
 くすのきの
 吉ヨシ 野ノ 山ヤマ
 櫻サクラ 井キ の
 見すれねど
 みのむしの
 そでせをみ
 あさなみを
 とる征矢ソヤ の
 たまごすき

ふ。むなしき數をかぞへたるは、死者の數は、壁に書き、今ゆくは、四條繩手の四といふ數なり。死の音を數ふれば

頓にきねたるは、夕付日承けたるにて、夕

日は、一旦は赤くなりて、頓に暮れゆけばなり。また、このは、正行の戦死より、吉野行宮の、頓に衰へて、夕宮の入りて、やがて暗くなりし如くなりしをいへり。また、行宮の、然か衰へたるにあはせは、北朝は、盛んなるが如くなれども、北朝も、名のみにて、武人のみ時めけるをいへり。ぬびす衣は、武人の着る衣、すなはち、甲冑をいひ、花の御所は、足利義満の室町の第にて、花の御所と稱へりといふ。木の芽に湯のかげろふは、武

こゝろよかけて
かねておもへば
寄方の水よ
影のみこのる
むなしき數を
四條繩手の
頓よきえさる
晩照さびしき
かへらじと
あづさ弓
うつろひし
過去帳の
かぞへさる
もふづくひ
行宮の
めうつしよ

(十三段)

まづあふらるゝ
雲居の庭の
えびすごろもよ
きらめきとさる
木の芽に湯の
冬さへよたつ
春のどりなる
すごくいなむし
麻呂ハ田樂
北の御所
せまけれど
佩く太刀の
花の御所
かげろふ
室町の
富草よ
いなごまる
白拍子

人のみ時めきて、種々の奢侈を極むれど、公家は、たゞ、落ぶれに、落ぶれて、武人に媚び、て、田楽もし、猿樂も、し、いろく、に、機嫌をとりて、纒かに、露命をつなぐ有様なれば、或は、武人の真似をし、て、反東聲をつかひ、或は、冠は捨て、烏帽子をかざるなどもせしを、うれさへにいできぬは、諸國をさすらひて、はてには、路傍に、仆れ死にたるなど、あぢきなかりし世のさまをいへり。木の芽は、茶にて、この時、茶事流すらに、武人は、ひたすを銜ひたり。富草は、稻の異名にて、麻呂は、

このごろ、公家の、みづからを呼びし語なり。ち、ろむしは、秋の末になく虫にて、寒さにかじけたる如き聲に鳴けり。世をうつせみは、音になきて

うつせみは、前句のちろむしにちなみ、また、後句のひをむしにちなみていへるなり。この段は、世のなりゆきを嘆く間に、南北朝、御合體となりて、天下統一の御代となりしかば、人民も、忘ばしは、肩を休められたれども、また、忽ち亂れて、氏もなき武人も、高位高官にのぼり、或は、執事などいふ者は、やうく

殿上人の
腰の
を
まぶらふ着ても
ひさひの志むむ
よるべなぎさの
つなぎもとめぬ
むすぶかゝなき
かじけのみゆく

折鳥帽子
あらそなる
としなみの
捨小舟
玉の緒の
かさいどの
ちろむし

六〇

世をうつせみの
音になきて

ひとつひりり
世のふとつなく
なりくなりや
月のみちりけ
風のあしさへ
都の空よ

天の下
てらせども
三乗の
四絃の
さごめなく
みざれての
たつ塵も

六一

足利將軍をも凌ぐべ
 くなりゆけるをいへ
 り。三栗は、なかにか
 たる枕詞にて、また、こ
 の邊の、數字の、一二
 三四を數へしめたるな
 り。四絃は、琵琶にて、
 琵琶には、満月半月の
 名稱ある故、次句を喚
 び起せり。
 星の位は、影さびて
 星の位は、三公の位に
 て、大臣の事をいひ、
 三笠山も、大臣、大將な
 どの異名なり。この段
 は、武人、跋扈の極、つ
 ひに、大臣も、大將も、
 名のみとなりて、世は、
 笠をかぶりたる髪のお
 かけみだれたるが如く
 なりしに、徳政などの
 暴政たこなはれてより

かるびあがれる
 星のくらゐの
 さすもかひなき
 笠のまゝけの
 ときよのみとく
 荆棘がもとよ
 生くとしもなき
 ふみしごきゆく
 えさむりひろき
 雲の上
 影さびて
 三笠山
 黒髪
 徳政の
 あをびれて
 民草を
 こまにしき
 大路も

は、人民は、荆棘の下
 に青びれて、京大路も、
 身を狭めゆく有様なり
 しに、遂に、應仁の大
 亂を生ぜしをいへり。
 狭布は、幅のせばき布
 にて、このあたりは、高
 麗錦といふよりはじめ
 て、すべて、機物をも
 て、句を成せり。また、
 さゆみは、古歌にも、
 「いかなればこひにむ
 さる、たく布のなごさ
 ゆみなる人の心か」と
 まめる如く、倦みつか
 れて、物にたゆむをい
 へり。また、絳絲は、
 節のおほき、わろき絲
 なり。
 空にたゞよふ
 雲の原
 この句は、月をいはん

身を狭布の
 節のみみゆる
 とけぬみづれよ
 年の緒ながく
 東西軍も
 空またゞよふ
 月代掠ふ
 兎よおちて
 末黒のすゝき
 さゆみなる
 絳絲の
 むすぼれて
 うちをへし
 やみぐさの
 雲の原
 よむひぼし
 飛火野の
 つのぐめバ

非天がさけぶ
 妙法の
 非天は、佛果を得ぬ鬼
 にて、前句の佛語をう
 けていへるなり。この
 段は、應仁以後、世は、
 たゞ、亂れに亂れて、今
 は、武人のみならず、
 僧徒も、亦た、修羅の街
 に出でたるをいひて、
 さて、織田信長の、こ
 の妖氣を一掃し、天下
 を淨めて、朝廷に仕へ
 奉りたりしを、明智光
 秀におそはれて、ゆづ
 りなく、本能寺にて自
 殺せしをいへり。妙法
 蓮華は、法華宗、わが
 たつ仙は、叡山延曆寺、
 他力をたのむは眞宗に

て、この三宗の僧徒、こ
 の時、常に、鬪争を事と
 せり。をてもこのもは、
 此方彼方といはんが如
 し。そよくは風の戦
 く音と、それよくと、
 通知する意とを兼ねて
 いはれたるなり。
 ほのきる空を
 うちはふる
 この段は、本能寺の變
 を、木下秀吉の許に、備
 中高松にいらせしに、
 この時、秀吉は、毛利氏
 と戦ひてありしに、こ
 の報知を聞きてより、
 高松城の圍をとぎ、毛
 利氏と和睦して、光秀
 を伐ちしかば、光秀は、
 山崎に敗れて、栗栖野
 に走り、遂に、士兵に
 殺されたるをいへり。

(十四段)

非天がさけぶ
 蓮華の紅蓮
 弘誓の海も
 涅にそめさる
 我らたつ杣も
 他力をたのむ
 阿彌陀が峯も
 奈落よおつる
 妙法の
 大紅蓮の
 濁江の
 墨染の
 おほとねの
 名號の
 くづれての
 修羅道の

如法闇夜の
 をてもこのもよ
 ふきさらひさる
 そよく、機を
 持のみざれを
 あやめづらしき
 御衣おりなす
 ふむろ機躡の
 嘆志のほむら
 桶狭間の
 雲霧を
 尾張風
 織田なれや
 くりりへし
 袞龍の
 織復よ
 まねらねど
 もえさてバ

能寺の煙の中より、使
 のいでたるをいひ、細
 谷川の帯とけては、高
 松の園の解けたるにて、
 この句は、古歌の「眞
 金ふく吉備の中山帯に
 せる細谷川の音のさや
 けさ」といふより成れ
 り。また、むすべば泡
 緒は、帯と水とには、む
 すぶ事ありて、泡緒は、
 紐の結方の名と水の泡
 とを兼ねたるにて、與
 に、前句より起りて、
 秀吉の、河を決する勢
 ひにて還り來たるをい
 ふ。をちかへるは、鷹
 の手に戻るをいふ語に
 て、これより、秀吉を、
 鷹とし、光秀を、雀、ま

た、ひがらとしてい
 れたり。す、みだかは、
 鷹の一種にて、よく、雀
 をとるものにて、ぬす
 たつは、鷹野の小鳥の、
 鷹にかくれて、ひそか
 に逃ぐるをいふ。
 關緒するつ、
 關緒、佐保姫の
 鷹の名にて、前句をう
 けたるなり。佐保姫は、
 また、春を守る神をも
 いへば、次句の枕詞と
 せり。光秀を滅し、天
 の一統せしかば、後陽
 成天皇の、秀吉が聚樂
 第、行幸ありしに、秀
 吉、諸大名を率て、よ
 く、朝廷に仕へ奉るべ
 き由を誓はしめしをて
 へり。柳が瀬は、勝家

煙ケリをモそらむ
 ほのソラきる空を
 雁カガヒの使ツカヒの
 細ホソ谷タニ川ガハの
 むすべば泡緒アワナ
 をちりへりくる
 すゞめあさりて
 巢山スヤマのぬぐら
 ぬすさつ日雀ヒカガ
 本ホン能ノ寺ジ
 うちをふる
 吉備キヒの山ヤマ
 帯オビとけて
 たざつ瀬セの
 すゞみごり
 やまざきの
 くらぐぐよ
 栗栖野クリノよ

關緒セキナするつゝ
 春ハルのかづらく
 いむゆる駒ウマの
 たちてつまづく
 賤シニが手テよとる
 絲イトのまつれも
 めぐれがいづる
 春ハルのどろなる
 畑ハタケもる男ヲら
 佐保サヘ姫ヒメの
 柳ヤナギが瀬セよ
 たつらみも
 賤シニがテ嶽ダケ
 芋イモ手テ纏マキの
 をさまりて
 峯ミネの回ワの
 ささつもり
 つゑよつく

の軍だちせしところ、
 賤が窟は、勝家の部將
 佐久間盛政の破れし處
 なり。いどののはつれも
 をさまりては、世の亂
 も治りてにて、次句の、
 農夫のさまをいふべ
 き料なり。はたつより
 は、木の名と畑とにか
 けていへり。くはは、
 鋤と、此はと驚くとを
 兼ねていへり。あらひ
 どの神は天皇にて、こ
 のは、後陽成天皇を申
 せり。梅鉢、澤瀉、葛、
 三葉葵は、諸大名の紋
 所にて、諸葉草は、葵
 の一名なり。
 何もろこしを
 あだし野の

七〇
 くはめづらしき
 いでましを
 みちきの庭よ
 志きしまの
 大和錦の
 さなもみぢ
 ありきこゝろを
 あらひとの
 神よちりひて
 手向草
 さゝげいでる
 うめをちの
 よそほひおもき
 おもごうよ
 軽くまつをる
 つらづら
 三葉あふひり
 もろとぐさ

この段は、豊臣太閤の
 征韓より、太閤薨後の
 大阪城のなやみをいひ
 て、徳川家康の、その
 處に乗せんとせしをほ
 のめかせり。何もろこ
 しを云々は、いかでか、
 故もなきに、外國に仇
 すべきぞ、太閤の、この
 舉は、弘安の蒙古の來
 りしに報いしにて、朝
 鮮を伐ちしも、弘安に、朝
 蒙古を導きしが爲なり
 といへるなり。また、
 のりぐちにひくは、馬
 を乗るやうに引くにて、
 すなはち導くをいふな
 り。こまうどは高麗人
 にて、今の朝鮮人なり。
 いしくは、うましう
 まし、よしうにて、
 復讐を褒めていふ語な

なにもろこしを
 あだし野の
 露もすれぬ
 弘安の
 罪のむくい
 くつらづら
 のりぐちよひく
 こまうどら
 うつや飛礮の
 さゞれいし
 いしく、仇よ
 かへし矢の
 弓張月
 影おちて
 四百餘州も
 くらむ世よ
 ありりもてゆく
 ハ洲よ

り。なににはは三津のは、
何事にも逢ひたるに
て、蟹の子は、大阪の
人をいふ。こゝは、世
に志ほじみなれたる大
阪城の人も、太閤薨後
は、葦をわけゆく船の
如く、萬づに、障りのみ
多くて、太閤の遺言のやうにもならずてありしをいへり。葦分小舟は、萬葉集
に「湊いりの葦分小舟さほりおほみわが思ふ君にあはぬころかも」などよめり。

なにそい三津の
蟹の子も
葦分小舟
さそりおほみ
なづみらちなる
東海道

吾妻男

射騎たて
吾妻は、前段のうめつ
みちよりかゝれり。う
めつみちは、東海道を
いふ。この段は、徳川
家康の、大阪の内訌に
乗じて、政權を奪はん
として、人しれず窺ひ

(十五段)
吾妻男が
射騎たて
ぬらふ火串よ
よる鹿の
數そそりゆく
夏山の
雨も日頃を
ふる河の

てあるに、内訌は、ま
すく長じて、獵師の
筒先に集る鹿の如く、
遂に、關が原にて、そ
の目的を達せしをいへ
り。吾妻男は、家康に
て、射騎は、獵師の、
鹿などを狙ふとき、身
を隠す爲に、木の枝な
どを折りて立つるをい
ふ。火串は、木の間には
さむ松明にて、夏の夜、
山中にて、鹿をよせんと
て、獵師のする事なり。
また、うなみ、さなみ
は、四月と五月との波
の名にて、こゝは、東軍、
西軍の、關が原に落ち
あひしをいへるなり。
せけばあぶれて
この段は、關が原にせ

なぐれよりくる
うなみさなみを
せけばあぶれて
みうさよかへる
みなぎる水は
つくつく、鐘を
佛の胸よ
月輪觀よ
影はみえじと
落合よ
關が原
みなもとの
江戸川や
たゝひ来て
大佛の
むすぶ手の
にこりさる
駿河なる

せかれたる東軍は、水の、
 が如く、水にちなめる
 源、すなはち、家康は、
 をまじりて、あふれたる
 水の、漲り落つるが如
 くなりしかば、種々の
 難題を、大坂に送りて、
 淀君を悩ましたり。然れ
 ども、家康は、己、みづ
 からさへ、その太閤の
 恩を受けたるを知れる
 をもて、天下の、己れ
 を議せん事を恐れて、
 勉めて、表面には、
 心なきをよそひて、裏
 面より、たえず攻撃せ
 ししかば、淀君は、思ひ
 悩み、夜は、夢にお
 そはれて、晝は、面杖のみ
 つかれて、晝は、面杖のみ
 してありしをいへり。

つくは、水のつく
 と鐘をつくとを兼ねた
 るにて、大佛の鐘の銘
 を、難題とせしをいふ。
 また、月輪観は、佛家
 の観法にて、こゝは、大
 佛の、左右の手をあざ
 へ、指を、輪の如くむ
 すびたるをいひて、家
 康の、潔白をよそひて、
 あるをいへり。また、
 によぶは、呻吟して惱
 めるをいひ、ゑくぼな
 ませくは、されど、淀
 君は、愁を帯びたるさま
 ば、愛敬ありといへるな
 り。この、歌にて、作者
 の苦心の、ところなり。
 桔梗刈萱
 こゝに、種々の秋草を
 敷へたるは、前句の女

人のこゝろを
 あさればよとむ
 夜殿の夢よ
 によびつゝつく
 ゑくぼなまめく
 桔梗刈萱
 うらみ大城の
 ほりよほりさる
 よぼろぐさつる

くみりねて
 淀川の
 おそされて
 つらづゑの
 女郎花
 葛の葉の
 いろくさひ
 歟よぼろ
 土塊の

大坂山
 つひよくづれて
 かひひひろへど
 むしされぎぬの
 かくれてむすぶ
 いとひこめさる
 いとで掻き鳴す
 聲すめろぎひ
 雲居のよそよ

峯も尾も
 たひらぎの
 くれららひ
 かくれ笠
 ひもろぎよ
 ひめぐとひ
 すらぎきの
 神なれや
 へぶてさる

郎花を孤立せしめんと
 の句法にて、こゝは、
 唯だ、家康の、種々の方
 法をもて、大阪城を堀
 り崩して、その効は、已
 に收めたれども、おの
 りは、隠笠にかくれて、
 隠り知らぬ様にもて、
 なしたりしをいへり。
 くはよほろは、鉄をも
 てる人夫にて、たひら
 ぎは貝の名、われから
 は虫の名、むしたれど
 ぬは、笠のめり、に垂
 れたる布にて、ろの
 をかぶれば、顔はかく
 る、やうになれば、か
 笠にかけていへり。隠
 かくれてむすぶ。

小^チ簾^スひきまの
 中^ナ心^コの^イ絲^トの
 妙^タよあやつる
 く^クつまをしよ
 鬼^{オニ}も^{ホトケ}佛^モ
 野^ノ伏^シ山^{ヤマ}伏^シ
 ひ^ヒく^ク神^カ樂^ケの
 秋^{アキ}野^ノの^{カズ}數^ノよ
 からりみうさふ
 ま^マごもり
 一^{ヒト}人^リして
 傀^{クワイ}儡^{ライ}の
 とやされて
 ま^マふくさの
 す^スりけよ
 を^ヲと^トき
 枯^{カラ}萩^{チギ}の
 いらぬ身も

至尊をば、先づ、神と
 も神と、京都に齋き奉
 りて、人世より遠ざけ
 奉り、第二には、諸大
 名は、おのれの、領地
 の間に分置して、か
 たみに、氣息を通せし
 めずかまへ、剩さへ、
 一皇子は、質の如く、大
 て、上野に擁し奉り、大
 名の妻子は、これも、大
 質の如くにて、江戸に
 置かしめ、おのれ、一
 人、中樞の地に立ちて、
 天下を操りしさまの、
 傀儡師の、人形をつか
 ぶが如くにてありしを
 いへり。ひもろぎは、
 神を齋ふ處、すがき
 は、神前にて搔鳴らす
 琴にて、歌はずして、
 たゞ鳴らすをいふ。ひ

さ^サや^ヤぎ^ギさ^サち^チさ^サる
 も^モら^ラく^クる^ル露^{ツユ}の
 さ^サけ^ケば^バま^マさ^サち^チる
 み^ミざ^ザれ^レう^ウら^ラふ
 さ^サやく^クみ^ミい^イで^デし
 ツ^ツキ^キ月^{ツキ}ら^ラ鬼^{オニ}火^ヒら^ラ
 ウ^ウミ^ミ海^{ウミ}路^チけ^ケそ^ソし^シき
 も^モけ^ケべ^ベた^タよ^ヨふ
 さ^サす^スや^ヤか^カる^ルの
 ア^アマ^マ天^{アマ}草^{クサ}の
 た^タま^マと^トき
 ヨ^ヨ世^ヨの^{チリ}塵^{チリ}の
 テ^テン^ン天^{テン}文^{モン}よ
 み^ミら^ラぼ^ボし^シの
 シ^シラ^ラ不^{シラ}知^ラ火^ビの
 カ^カミ^ミ神^{カミ}の^チ道^チ
 タ^タタ^タ種^タ子^ネら^ラ島^{シマ}
 カ^カル^ル輕^{カル}足^{アシ}よ
 セ^セ七^セ

結梗は、秋の七草の數に
 入らぬゆゑにいへり。
 秋野の數に
 いらぬ身も
 佛も、系にひかれたる
 人形の如く、徳川氏に
 はやされて舞ひ躍ると
 なり。また、をかど、
 きは、結梗の異名にて、
 神樂の岡をうけて、次
 句の枕詞におきたるな
 り。

こ、は、この時、いま
 だ、徳川氏の政略は、ま
 だ、徳川の上までには及ば
 ず、宗徒は、おの
 づから、治民の外にて
 ありしを、ひて、天主
 教徒の、天草に騒ぎた
 ちしを、ひ、天主教の、
 はじめ、て、天文中に
 來しを、ひ、また、徳
 川氏の、の、宗門をも
 したるを、ひ、思ひな
 禁制を、いふ、あらしに
 をなへたり。からかみ
 は、神樂歌の名、から
 を、枯れたる、荻に
 て、からかみの歌の語
 なり。ゆらくは、ゆら
 く、ずるを、いひて、騷
 ぎ、た、ち、たるを、いへり。
 この句は、萬葉集に、

ふみておどろく
 とむしりつきし
 あどへのこれる
 誰ほるもろよ
 法いつとへし
 行手をぐらき
 鱈も野槌も
 にがりてみれば
 登さへゆるず

うまざくり
 ひちりこの
 葡萄萄牙
 外國の
 暮露ぐやく
 海山ハ
 すむつりり
 葦蟹の
 横さらふ

道よ莫來の
 寺主の竹の
 かしこき節も
 よよをこめさる
 つくりすがるう
 こゝろよかけて
 こまほしげなる
 どなりかくなり

關守を
 寛永の
 園生よハ
 あるものを
 杖代ハ
 武藏燈
 やましるの
 瓜つくり
 鳴雷も

「初春のはつねの今日の玉箒手にとるからにゆるく玉の緒」とあるに依りたるなり。天文は、天象と年號とをかねたる語にて、みかほしは、太白星の類の大なる星をいひ、不知火は、筑紫をいふ。筑紫は、このごろ。殊に、天主教の蔓延せし處なり。種子が島は、鐵砲の事にて、この時、葡葡人の、鐵砲を、種子が島に携へ來たればいへり。また、かるかは、鐵砲に、彈藥をこむる細き棒なり。うまさくりは、馬の足跡のくぼみに、泥水の溜れるに

て、ひちりこは泥なり。こは、徳川氏をばじめて、誰も、天主教は、宗門の事として、心にもかげざりしに、天草の亂にあひて、一驚せしを譬へたるなり。ほるもかは、遙かにといふに同じく、暮露は、虚無僧の類をいふ。また、野槌は、山にすめる妖怪にて、鰐の、海にすみて、害をなすに對へていへり。また、すむつかりは、熬豆に、酢をかきたる苦きものにて、こは、住むにいひかへしめて、次のに、枕詞に用ひたり。にがりてみれば、蓋蟹の

端居^{ハシ}してきく
由^ユ比^ヒの濱^{ハマ}風^{カゼ}
荒磯^{アラシ}よみえて
とればなみよる
たゞ影^{カゲ}をのみ
けぶりをさめて
春^{ハル}をさへづる
それ水^{ミヅ}の花^{ハナ}の
待^{マツ}乳^チの山^{ヤマ}の

君^{キミ}が代^ヨよ
ふくかひも
手^テもたゆく
帚^{ハシ}木^キの
鳥^{トリ}部^ベ山^{ヤマ}の
鎌^{カマ}倉^{クラ}の
うぐひすの
さらえのみ
夕^{ユフ}こえて

隅^{スミ}田^タ河^カ原^{ハラ}の
ちしほそめなす
色^{イロ}もますほの
薄^{スベキ}がまねく
よべべこさふる
よそよのきりぬ
魂^{ミカゲ}魄^ハたづぬる
總^ホよあらされて
筵^{キヌ}子^スなく野^ノの

雪^{ユキ}の夜^ヨよ
吳^ク藍^{ナキ}の
赤^{アカ}總^ホなる
魂^{タマ}よむひ
天^{アマ}彦^{ヒコ}も
是^ミ樂^{ラク}よ
眞^{マコ}心^{ココロ}の
深^{フカ}雪^{ユキ}鳥^{トリ}
ひるければ

この段は、天主教を、悪しとみれば、悪くみゆるまゝに、いたくにくみて、遂に禁制せしをいへり。竹の園生の一段は、前にいへる徳川氏の政畧として、皇子を、上野に置き奉りしをいへるなり。莫來の關は、陸奥にあるを、こゝは、たゞ、來などいふ意のみに借れるなり。

寺主は、一寺の主をいひ、竹の園生は、皇族を申す。杖代は、御杖代とて、至尊に代り奉りて、神に仕へ奉る人を申す語のあるによりていへるにて、こゝは、寺主にすゑられ給ひし皇子の御事にて、徳川氏は、この杖代を何とするぞといへるなり。武藏鐙は、次のかけての枕詞なり。

心にかけて 山城の
この初段は、古歌に、「山城の鳥羽のわたりの瓜つくりこまほしと思ふをりぞたほかる」また、「音にきくこまのわたりの瓜つくりとなりかくなりなる心かな」とあるによりて、句を成せり。すべては、至尊も、これまでは、徳川氏の心のまゝに、となりかくなり、なりてはせしかど、後光明天皇は、これを物うくら

マナビ 學問の道も かつみえて
ユキ 雪よ 螢 ホタル 螢よ かつやける
タイヘイ 世の大平の 海津路よ
サワギ 騒を三津よ すみなれて
おもひやかけし おほしほの

ぼしたる事もあり、同じとき、由比正雪の、徳川氏を窺ひたるも、由ありげなれど、この人は、常に無言なりしかば、自殺の後には、唯だ、影をさうふる如くにて、何事とも知られずて止みたれども、自殺の翌年には、また、別木莊左衛門、林戸右衛門などの、徳川氏を謀れる事もありしかば、この間の消息は、帚木の如くならんとなり。また、後段は、徳川家綱の薨せしとき、酒井忠清の、鎌倉の故事にならひて、皇子を迎へて、將軍として、たのれ、北條氏とならん

とせしをいひて、次に、赤穂の義士の上をいへり。
帚木は、信濃の園原山にある木にて、遠くみればありて、近くよればみえずなる木なりとて、古歌にも「園原や伏屋におふる帚木のありとはみえてあはぬ君かな」とよめる木なり。鳥部山は、人を葬むる處、木の花は、皇子の異名にて、家綱の薨と、忠清の議とをいへり。

待乳の山は、萬葉集に、「待乳山ゆふこえくればいほ崎のすみだ河原にひとりかもねん」とある處にて、赤穂義士の、種々の艱難をなめて、雪の夜に、主の讐をうちたるをいへるなり。また、魂よほひは、義士の、讐の首を、主人の墓前に供へて、主の靈魂を呼べるをいひ、天彦は、山彦の如く、呼ぶ聲の、空にひびくをいふ。曼樂は、死人のあらはるゝ島なるを、こゝは、墓地をなずらへていへるなり。

雉子なく野の ひろければ
前段の深雪鳥の、雉子の異名なるがゆゑに、こゝに、雉子をいひいでたるなり。こゝは、たゞ、廣き野には、種々の道もある如く、久しく治まりし世の中には、學問の道も開けたりといへるにて、さる太平の世に、大鹽平八郎の亂はと驚き

りの波の立ちさわぐを
 いへるにて、こゝは、
 使節の歸國の後、攘夷
 論など起りて、國內の
 騒ぎ立ちしをいへり。
 むつのは、雪の異名、
 雪見草は、卯の花の異
 名なり。
 この段は、ふつきには
 り、世の中、櫻田の變よ
 り、公卿の間に、騷ぎ
 朝廷の遂に、七卿は、長
 門に走りしに、長門の
 人は、薩摩の人と、ひ
 とつに、なりて、また、
 攘夷論をもて、徳川氏
 に、迫りしかば、徳川氏
 は、朝廷に對し、奉りて
 も、亦、外國に對して
 信義を失へるさし

まになりて、進退を
 まれるが如くなりしを
 いへり。星まよひは、
 種々の星のみゆるをい
 ふ語にて、こゝは、月
 卿雲客の心にて、公家
 をいへり。昂星は、七星
 の、一所によりあつま
 れるをいふ語にて、こ
 ゝは、七卿を譬へたり。
 また、魚子は、さやの
 枕詞にて、古歌にも、
 「逢ふ事のかたなきし
 たるな、つこのさやか
 に人の戀ひらる、哉」
 などよめり。また、む
 つぶと、なつと、は、
 六七を數へたる句法な
 り。志ほさおは、海潮
 の、兩方よりゆきあひ
 たる處にて、吾妻から

おもひまられて
 香をとめてくる
 いつよのあらぬ
 ちりほふ庭の
 あな卯の花の
 たへぬ雲居の
 昂星のむつぶ
 さやうよおつる
 薩摩の瀬門の

たちをなの
 櫻田の
 むつのは
 雪見草
 おとぎよの
 星まよひ
 魚子の
 長門の海
 高潮も

あふれおちあふ
 乗りなやみさる
 あづまうらげの
 内外ふらがる
 ぬくかともなき
 獵夫よあふら
 水末をなれて
 とべばつまづく
 うつぶきいでて

志ほさおを
 吾妻船
 ふさまよの
 無戸室の
 戸無美山
 むさ、びの
 鳥羽伏見
 おほさるの
 泛船の

げは、古歌にも「賤の男があづまからげの麻衣ふたまた川はさぞ渡るらん」などもよみかければ。ふたまたにかけたり。うつむるは、四方、みな塞れる室にて、徳川氏のなやみをよそへたり。

この句は、萬葉集の、「むさ、びは梢もどむ」と足引の山のさつをに逢ひにけるかも」とある歌より成れり。さて、こゝは、徳川氏は、進退きはまりて、將軍職返上の事となりたれど、たゞにもえあらで、遂に、鳥羽、伏見に戦ひて、つまづきて、大阪に走りて、船路より、

江戸に逃げたりしかば、官軍に抗せし者もありしかど、やがてをさまりしをいへり。野守の鏡は、野中の溜水にて、次の逆水のあらひにいへるなり。逆水は、武蔵野にある由にて、古歌にも「吾妻路にありといふなる逆水の逃げかくれても世をすむす哉」などあり。實は、逆水は、水といへども、水にはあらず、かげろふなりといへり。みえずなりたる内木綿の

この段は、徳川の遣臣の亂みやみて、王政復古の大御代となりしをいひ、また、日本の國

うくれべをしる
御坂の相模
野守のかゞみ
行方さゞめぬ
上野またまる
終よかくれて
みえずなりよる
こよ、眞途國
あしぐらを
武蔵野の
かげきえて
逆水の
よどみさへ
箱館も
内木綿の
さきえひを

(十七段)

豊葦原の
ふらびあふぐ
ひりりもたりき
たてるの瓊矛
千足の國の
何またぐへん
猛雄がとるや
けぶるにほひの
むろしぐさりも
ひとくさへ
高千穂の
日の本よ
くまし矛
雄々しさへ
益荒雄の
焼太刀よ
ほのりなる
きくなれて

體と、日本人の特性とを述べて、さて、その國體と特性とを、萬世に傳へんには、國の歴史を、童部に語り聞かせて、その心にましましむべしといへるなり。内木綿の眞迹國は、皇國を稱へていへる古の語にて、千足の國といへるも同じ。初昔の駒も云々は、古歌に「山かつの野飼の駒もかへるなり初背に草を志がひかけつ」とよめる歌によりたるにて、すべては、日本男子たる者は、眞心をもて、君に仕ふるものぞ、この事を、等閑に思ひわするなとなり。あはれ、童部たち、よくよみ、よくおぼえて、立派なる日本人となりたまひねかし。

標註世繼の歌

きけバてゝろよ こもりくの
 初^{ハツ}背^セの駒^コも 荷^ニなふてふ
 草^{クサ}よハあらぬ きみの穂^ホの
 君^{キミ}よつらふる 眞^マてゝろハ
 ふさよそらみて うなりぶす
 秋^{アキ}の田^タの實^ミの おほろりよ
 おもひをすするな ちめ髻^{ウナキ}髪^キ』

明治三十年六月廿五日印刷
 同 年六月三十日發行

標註世繼の歌
 (定價金拾五錢)

著 者

物 集

高 見

發 行 者 兼 印 刷 者

金港堂書籍株式會社
 東京市日本橋區本町三丁目十七番地

代 表 者

右 社 長

亮 三 郎

賣 捌 所

各府縣特約販賣所

